

475
7

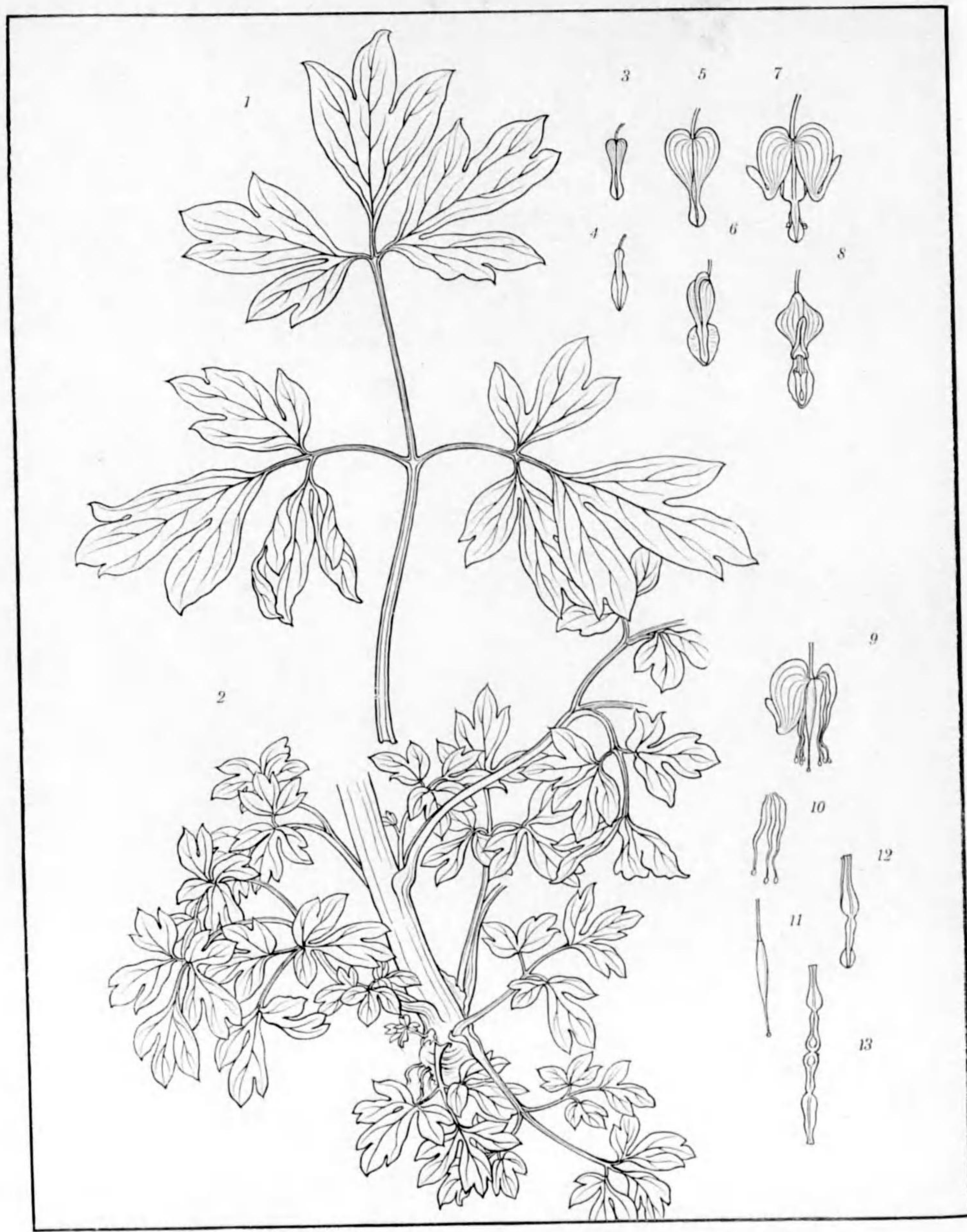
羣芳圖譜

第一輯
第九編

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始





1. 葉。 2. 莖ノ最下部。 3. 蕾。 4. 全側面。 5. 苞ニ依テ包マレタルモノ。 6. 全側面。 7. 苞ノ内
 邊捲キ上ガリ花体ヲ表ハシタルモノ。 8. 全側面。 9. 一方ノ苞ヲ去リテ兩葉ヲ表ハシタルモノ。
 10. 雄葉。 11. 雌葉。 12. 兩葉ヲ包メル膜。 13. 全膜ヲ上下ニ開展シタルモノ。



Dicentra spectabilis, DC.
 (丹壯包栴) うきんまけ

荷包牡丹

Dicentra spectabilis,
DC.

(罂粟科 Papaveraceae)

支那の原産なり。其葉牡丹の如く、花荷包に似たるを以て荷包牡丹の名あり。其花魚兒の累々として相比するが如きより、魚兒牡丹の稱あり。我國にては之を華鬘草と曰ふ。また其花の綴連して下垂すること恰も華鬘の如きを以て名を得たるなり。草木圖説に云く

春宿根芽を出す高さ二尺許。葉略ぼ牡丹葉に似て小。殆ど類葉牡丹の如くにして微厚。三四月葉腋に一莖を出し扁圓淡紅色にして細梗あり十數花を下垂し穗様に連綴す。其花上面淡紅色の苞を以て被ひ已にして二裂し尖反し兩邊に分るゝに至りて初めて白色の花體を露し體中に子室あり。扁長莢様内に細子を収む。雄蕊六莖左右に分れ體外に出て更に彎り集りて柱頭を夾む。其盛花にありては葯僅かに體外に見ゆ。其莖兩側なるは膜様にして中間に線様の一莖を挟む。此花總て異様にして名狀し難く他に比類の品を見ず。植物學者の記する所此の如し以て其花の異様なるを知るべく華鬘草の名命じ得て殊に適切なるを覺ゆ。荷包牡丹宋以前に於て所見なし。蓋し牡丹

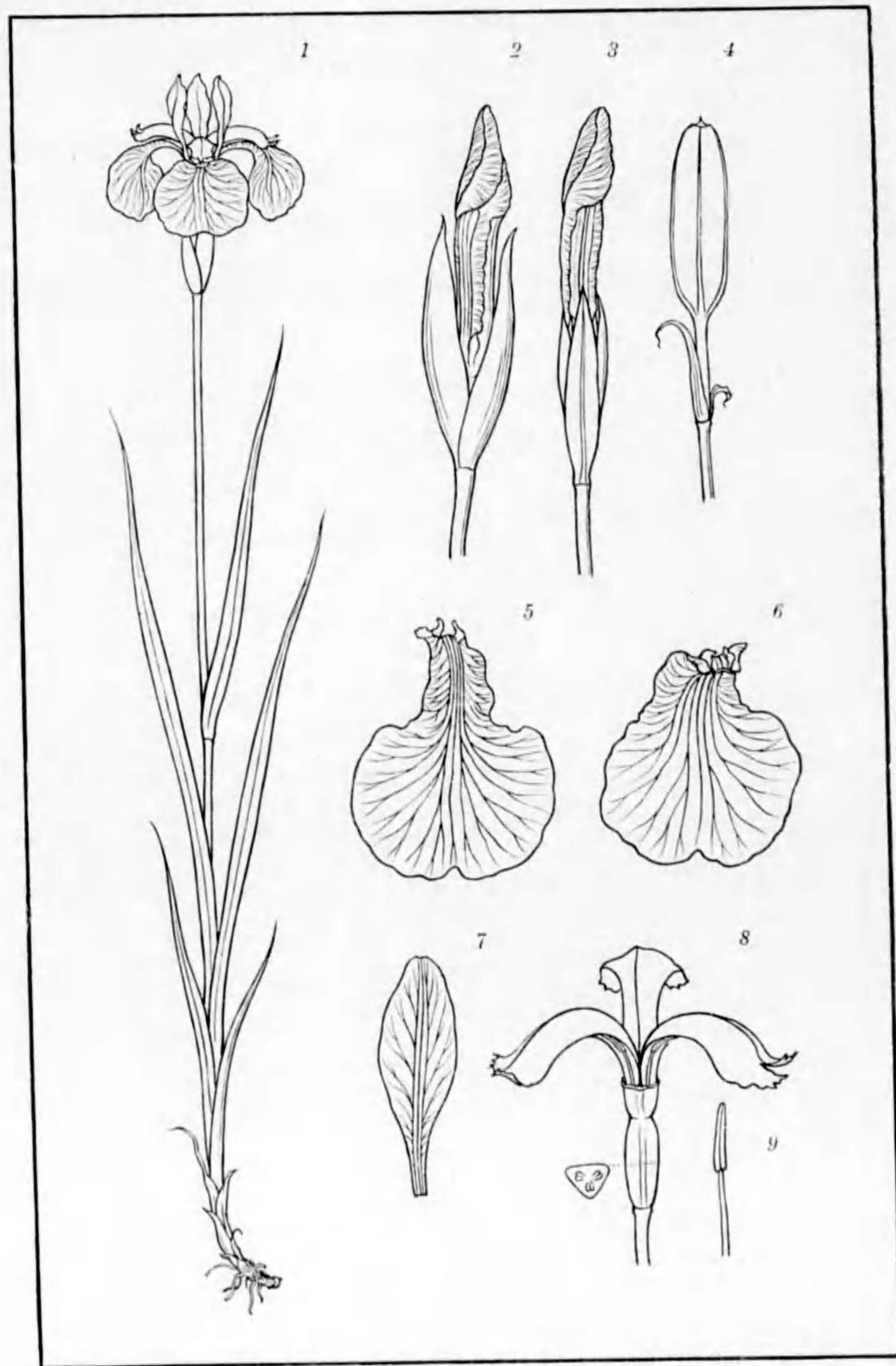
の大に著れたるは唐の開元天寶に在り。此花更に其後に晚出して牡丹の名を假冒せるならんか。南宋の周必大に至り始めて題詠あり曰く、

魚兒牡丹 得之湘中 花紅而蕊白 狀類雙魚累々相比 枝不勝壓而下垂 若俯首然 鼻目良可辨 葉與牡丹無異 亦以四月開 因是得名 其幹則芍藥也 余命曰花鬘 而賦是詩 聞江東山谷間甚多

天教姚魏主芳華 合有宮嬪次第紀 玉頸圓瓊宜粉面 霞裙深染學葦衣 枝頭窈窕魚雙貫 風裏飄飄鳳對飛 莫把根苗方芍藥 留春不似送將歸 牡丹を花王と稱するに對してこれを花鬘と曰ふ。命名佳ならざるに非ずと雖も此花果して承當し得るや。必大また一詩あり。曰く

太守趙山甫示和篇 次韻爲謝 阿嬌金屋著芳菲 當御連環聚衆妃 龍女墜天預素頰 鮫人出水織輕衣 袖垂戶外瞻雙引 燕在宮中第一飛 不用蠅魚箋爾雅 使君行合左箱歸 花鬘の爲に粧飾甚だ力む。然れども爾後賞詠譽を絶ち芳聲随つて揚らず。豈花鬘竟に花王に配するの麗品に非ざるか。抑もまた薄命不遇にして然るか。

此花の我國に輸入せられたるは何れの時代なるを知らず。歌俳の流詠に上らずと雖も亦庭園間の一佳品たり。節恰も陰曆灌佛會の前後に當りて盛んに花を開く。其の紅白間錯累々相次して垂るゝ處端りなく彼の佛頂に飾る華鬘の妙色を想起せしむ。嗚呼華鬘草。余れ爾の爲に大自然無量の功徳を讃嘆して花三昧の淨域に入らむ。



1. 全形。2. 蕾。3. 全側面。4. 果實。5. 萼。6. 全背面。7. 小蕊。8. 兩藥并=子房。9. 雄蕊。



Iris sibirica, L. var. *orientalis*, Maxim.
(蘇溪) めやあ

菖蒲

(菖尾科 Irisaceae)

Iris sibirica, L. var. orientalis, Maxim.

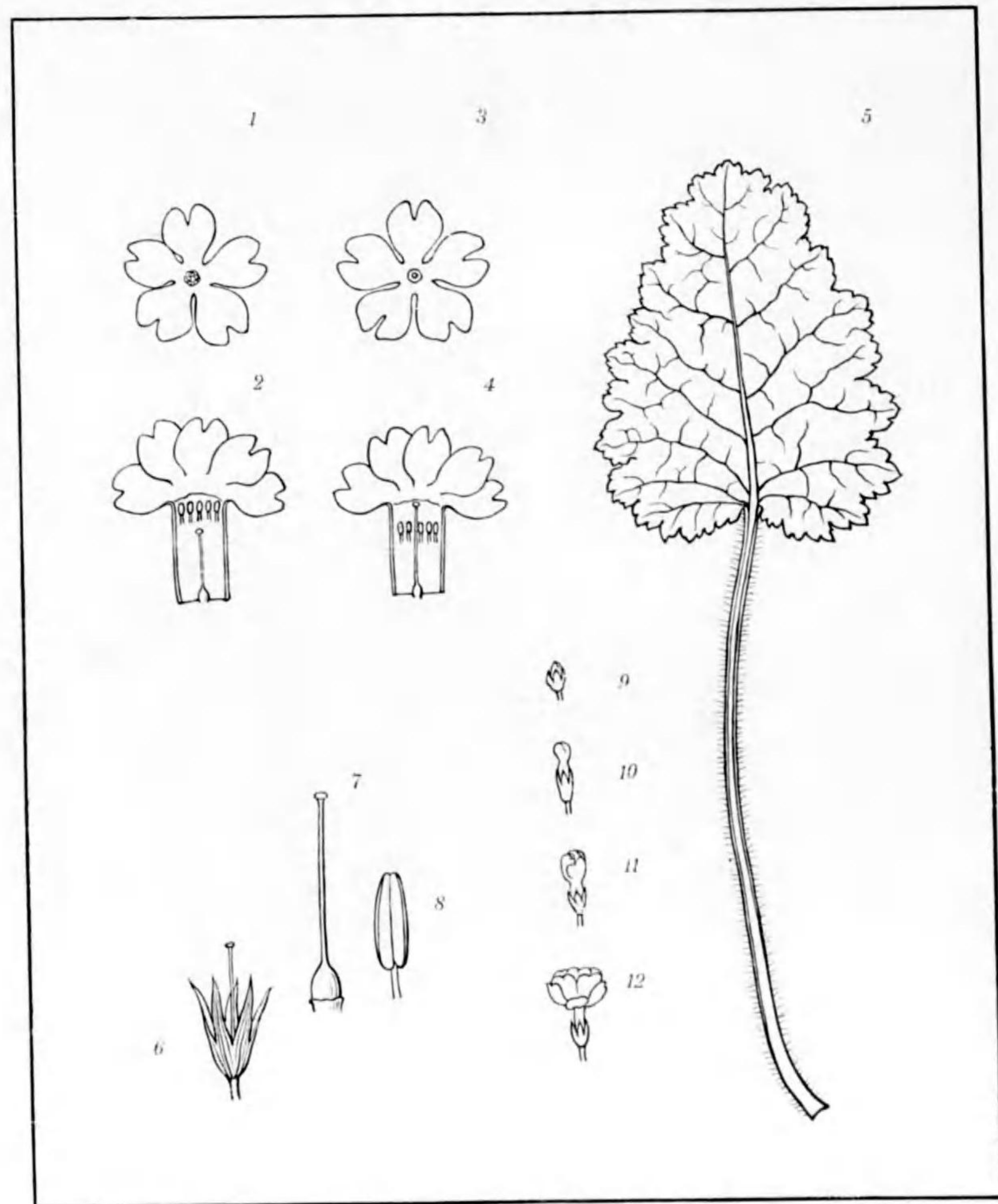
ハナアヤマ略してアヤマと曰ふ。山野沼澤に自生しまた觀賞用として園庭に栽培せらる。葉は燕子花に似て狭小。葉面微に劍脊あれどもハナシャウブの如く顯著ならず。鞘苞は緑色にして紅紫色の采あり。花には小梗あり鞘苞より短し。萼片の柄は廣潤にして毛なく弓状に彎曲して開出す。黄色にして中部に暗紫色の縦脈及び細斑點あり。邊緣に向つて褐紫色の横脈を放射しハナシヤウブ並に燕子花の之なきが如くならずして頗る異采を呈す。花色紫碧を常とすれどもまた白色の者あり。妍雅頗る野趣を帯ぶ。凡そ水陸の卉草末だアヤマの如く名の爲に累はさるゝものはあらず。彼の端午の節句に軒端高く挿みて嘉節を祝する菖蒲即ちアヤマグサも亦略してアヤマと曰ふ。古歌にあやめふくかやが軒端に風すきてしどろに落る村雨の露。後鳥羽天皇 かをりあふ庭の棟の花ちりてあやめが軒をすぐる夕風。家隆 うちしめりあやめぞかをる時鳥啼くや五月の雨の夕暮。攝政太政大臣 とあるは即ち彼のアヤマグサのアヤマにしてハナアヤマのアヤマにあらざれども其稱

呼の偶ま相同じきより動もすれば彼此混淆して殆ど判別すべからざるの怖れなきにあらず。然れども是れ猶可なり。其ハナシヤウブと相混するに至りては則ち更に太甚し。蓋しアヤマグサに菖蒲の漢字を當てこれをアヤマと訓ぜしより一轉してハナアヤマに花菖蒲の漢字を擬するに至り而して彼のハナシヤウブにも亦固より花菖蒲の漢字を當つ。是に於てハナアヤマとハナシヤウブと等しく花菖蒲の漢字を負ふて何等の區別なきを致せり。試みに看よ。

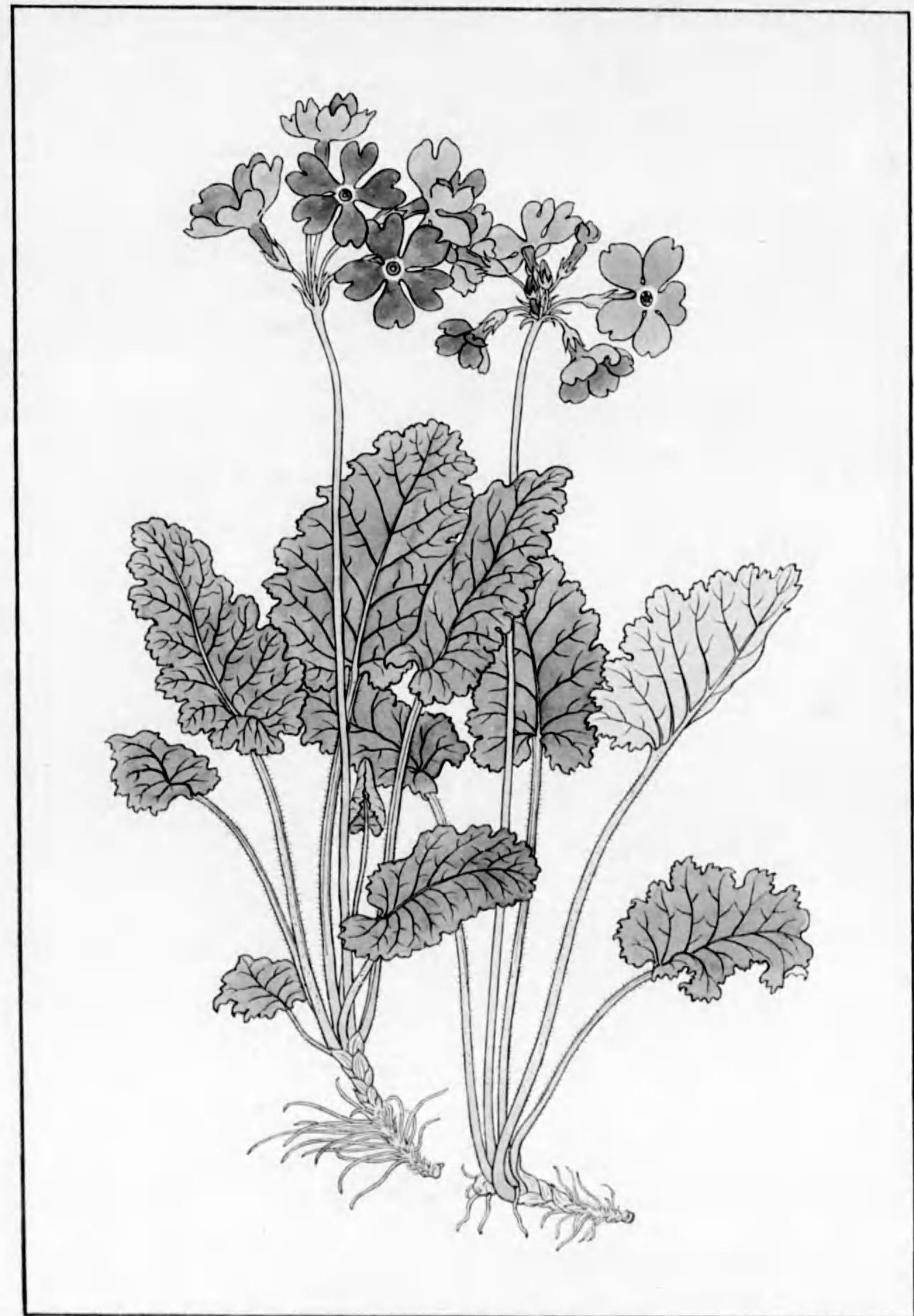
隠れ家に娘二人や花菖蒲。多喜郎 花菖蒲九條はむかし揚屋哉。月居 しのゝめや雨ふる沼の花菖蒲。黙哲 の如きハナアヤマを詠せるか將たハナシヤウブを寫せるか細心精究するものに非ざるよりは、いづれあやめと引きぞ煩らはずや。ハナアヤマとハナシヤウブとは必ずしも其葉面に劍脊あると否とを問ふまでもなく、一見して容易に區別するを得べく、彼れは色彩の鮮麗を以て勝り、此れは風姿の閑素に於て長を見る。而してその彼此相混すること此の如し甚しいかなハナアヤマの名の爲に累はさるるとや。我國の本紳家はハナアヤマに擬するに漢名蓬菖を以てすれども果して適當なるや否やを知らず。

此花舊くより庭園に栽培せらると雖も燕子花若くはハナシヤウブの如く觀賞せられざりしと見え、評六はこれを評して、あやめは、小づくりなる女の眼を病める心地ぞする。(百花譜) と云へり。豈また其楚々可憐の野趣あるを取れるか。

潮來出島の眞菖のなかく、あやめ咲くとはしほらしや。香取洞畔扁舟を熨めて十六島十二橋、繪畫くが如き間に容與し、蒼翠満らんと欲する菖蒲叢裡時にアヤマのしほらしく紫碧を粧點するを見る。水郷の風物竟に此花を缺く可からざる也。



1. 短柱花。2. 全縦断。3. 長柱花。4. 全縦断。5. 葉。6. 花筒ヲ取去リタル花。7. 雌蕊。
8. 雄蕊ノ葯廓大。9. 10. 11. 12. 開花ノ順序。



Primula cortusoides, L.
うきらくき

櫻草 *Primula cotinifolia*, L.

櫻草科 *Primulaceae*

櫻草は其花の櫻花に似たるを以て名を得たり。春初に宿根苗を生じ、一柄一葉葉は長さ三四寸幅これに半はし、邊縁刻缺、毎刻更に三五の鋸齒あり、數葉一窠を成し、葉間莖を抽出ること五六寸頂に數花を繖簇す。花は鐘狀にして五裂、瓣本細く末大に頂端小缺間をなして、略ぼ櫻花の瓣尖の如く、色淡紫を常とすれども、紅白濃淡無數の變種あり。色鮮麗極めて愛すべく、櫻草の名に耻ぢず。櫻草は好んで河畔濕潤の地に叢生す。東京近郊にては、荒河の沿岸の如き、古來この草を産するを以て著る。理學博士三好學氏説きて曰く

東京市を貫流する隅田川の上流ある荒川の沿岸には、所々に櫻草の生えたる原野あり。此原野は地味に於ても、又所生の植物に於ても、普通の原野と頗る其趣を異にせるにより、予はこれを櫻草原野 (*Primula Plain*) と名づけたり。四月下旬の頃、此等の原野に到りて見れば、一面に櫻草發生し、紅色の花を開き、美麗言はん方なし。櫻草の外に著るしき草は、野漆にして、花部の外圍の葉が鮮かなる黄色を呈せるにより、櫻草の紅花に對して色の配合甚佳なり。此外に向

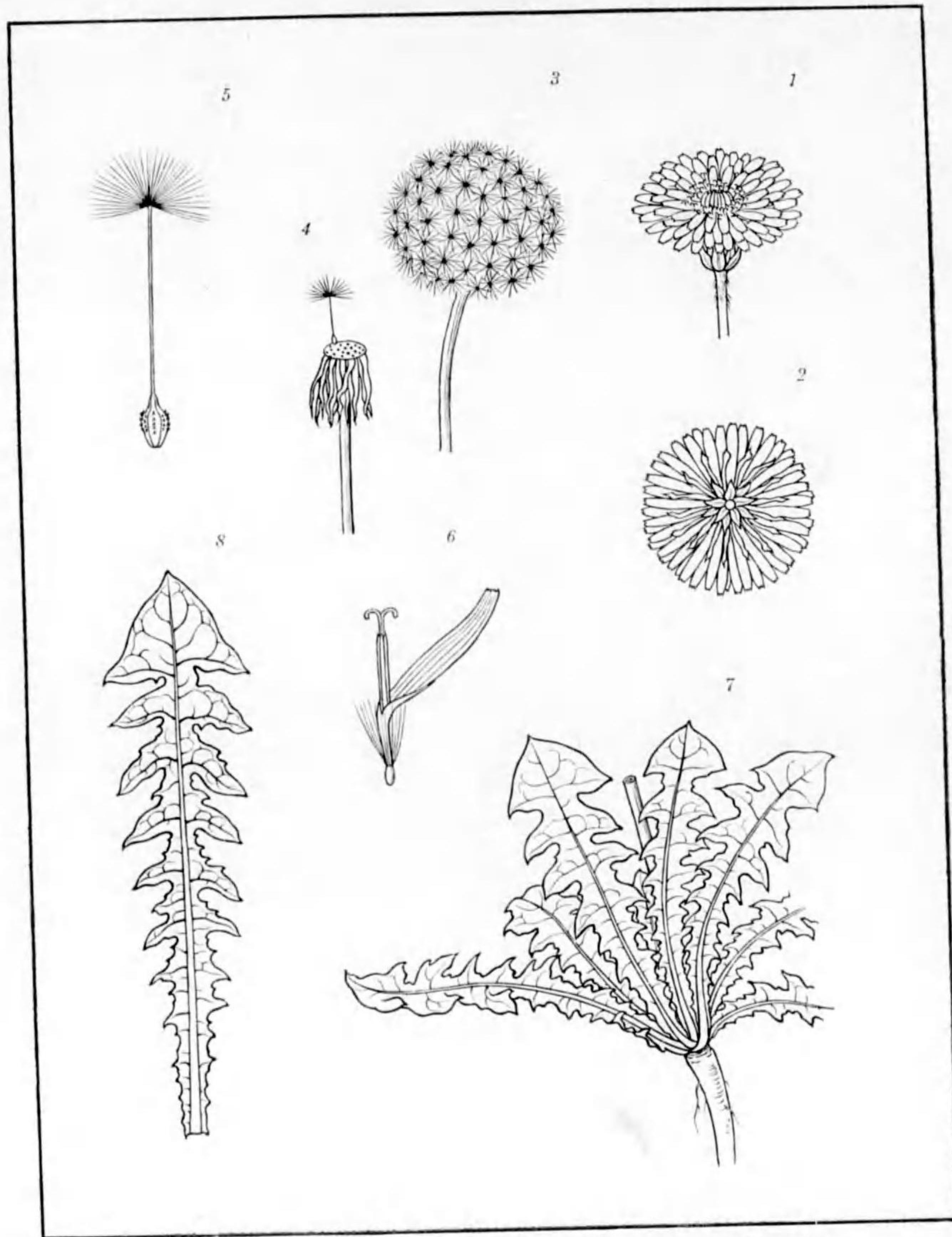
固有の草類は、紫の花の咲く十字草、黄色の花を開くいさか、淡紅色のえんて、さく、ひらさき、けん白と淡紫との絞りのすみれなどにして、すいばからまつさうの如きものも亦共に發生するを見る。凡べて櫻草原野は、河岸より數丁に達せる平地にして、樹木とははんのさやなぎ、其他少數の種類の生ずるのみ。一望廣潤の原野は、美はしき花にて飾られたれば、麗かなる春の日の心地は十分に現はれたり。故に斯る原野は、古來名勝地として知られ、都人士の多く遊覽したる所なり。浮間の原戸田の原の如き是なり。

櫻草原野の景趣を寫し得て、周匝細微を極む輕裝短鞋を穿ち、麗服麗傘を懸せる士女此間に向つて青を踏み翠を拾ふ。また看櫻後の一樂事たらずんばあらず。櫻草には異品甚だ多く、形態色觀の變化勝けて算すべからず。藤森弘庵に三浦氏の草櫻を記せる文あり。其の花の變化を描寫すること至つて詳かなり。曰く

路歴忍城、訪芳川裏、開市路有三浦泊翁者、善培養草櫻、多珍異、拉裏畫往觀焉。草櫻俗間所稱、余未詳漢名爲何、而其狀肖我國櫻花、而色紅者其常也。今三浦氏之草櫻、其爲瓣、有單有重、有大有小、有疎有密、其爲狀、有如海棠者、有

如金沙羅者、如藤藤者、如茉莉者、如麗春者、或如樺棠、或如梔子、其他殊類、詭形不可殫狀、其爲色、有紅、有白、有紫、有碧、而紅有肉紅、有嬌紅、有淡紅、有鮮紅、有殷紅、有粉紅、深紫淺紫不同其色、雪白月白各從其類、水碧石青、或紫或藍、或倒暈、或間雜、或色同而狀異、或形肖而彩殊、其爲品幾三百、載以磁盆、盆各挿小牌、以標其色、架間三面、羅列於其上、前低而後昂、花彩爛熳、如銀錦繡、奇異珍詭、過於所聞、余因問其術、翁曰、是無他術也、能節其燥濕、時其寒溫、擇其肥土之物、勿過勿不及、如愛子如育嬰、而見其有稍異者、輒別而栽植之、使以成其異、見其有少珍者、則別而栽植之、使以成其珍、如斯而已矣、大凡物之有珍異、不止草櫻也、唯其珍異者、尤難於栽培、而養之者、不知其珍異、分別而培養之、是以雖有珍異、不能自成其珍異、與凡卉同歸於腐朽、豈不悲哉、余聞而歎曰、翁蓋以風世也、乃記之。

弘庵の所謂草櫻は、即ち櫻草なり。此草日本以外に在りては、歐露より東して西比利亞を通じ支那の北部に分布す。滿洲にては之を翠蘭花と曰ふ。弘庵が漢名の何たるを知らずといへるも亦宜なり。



1.花。 2.花ノ背面。 3.果實。 4.花托及萼片。 5.種子廓大。 6.舌狀花。 7.根。 8.葉。



Taraxacum officinale, Wigg.
(英公蒲) ぼぼんた

英公蒲

Taraxacum officinale, Wiss.

(菊科 Compositae)

タンポ、古名はタナ。またフヂナ鼓草の名あり。漢名を蒲公英と曰ひ黄花地丁白鼓丁字々丁金簪草等の別名あり。タンポ、のタナは古名タナの轉にして、ボ、は新井白石以て漢名字々丁の音を移せるならんと爲し、谷川士清以て實のほ、けるをいふならんと爲せり。孰れか是なるを知らず。フヂナの義も亦未詳。鼓草の名は白鼓丁の漢名より出てたりと爲すもの多けれども、また別に説を立て、

蒲公英に鼓草の異名あるは、其名の鼓の音に似たるを以てなり。我等は鼓の音をボン〜と聞けども、我等の祖先はこれをタン〜と聞けり。近松墨林が丹波興作の書き出しにも、大名に生るゝ種の一粒が何萬石か幾萬人、腹の中から敬ひてもて囃したる百鼓、たんばの國の一城主と書けるを見ずや。

と主張するものあり。是れ偶々丹波興作に『もて囃したる百鼓、たんばの國の一城主の語あるを見て説をなせるのみ。未だ概すく從ふべからず。

花さくも人や諫めのつゝみ草苦ふかき世の春を知れとて 公 通

蒲公英は原野路傍に多く冬より多葉叢生し春に至り、數莖を抽きて連々花を開く。一莖一花。莖狭長にして多片二重に並列す。外なるもの短く、内なるもの長し。花瓣は頭に尖細五齒ある缺箇にして、大小鱗次し、單葉の菊花に似たり。花後萼片盡く反下し、裸牀上に圓錐様の紫冠を着け、風に隨つて飛散す。花色に黄白の二種あり。

蒲公英は和漢ともに古來藥劑用としてこれを貴重せり。瑞竹堂方に還少丹の方を傳ふ曰く

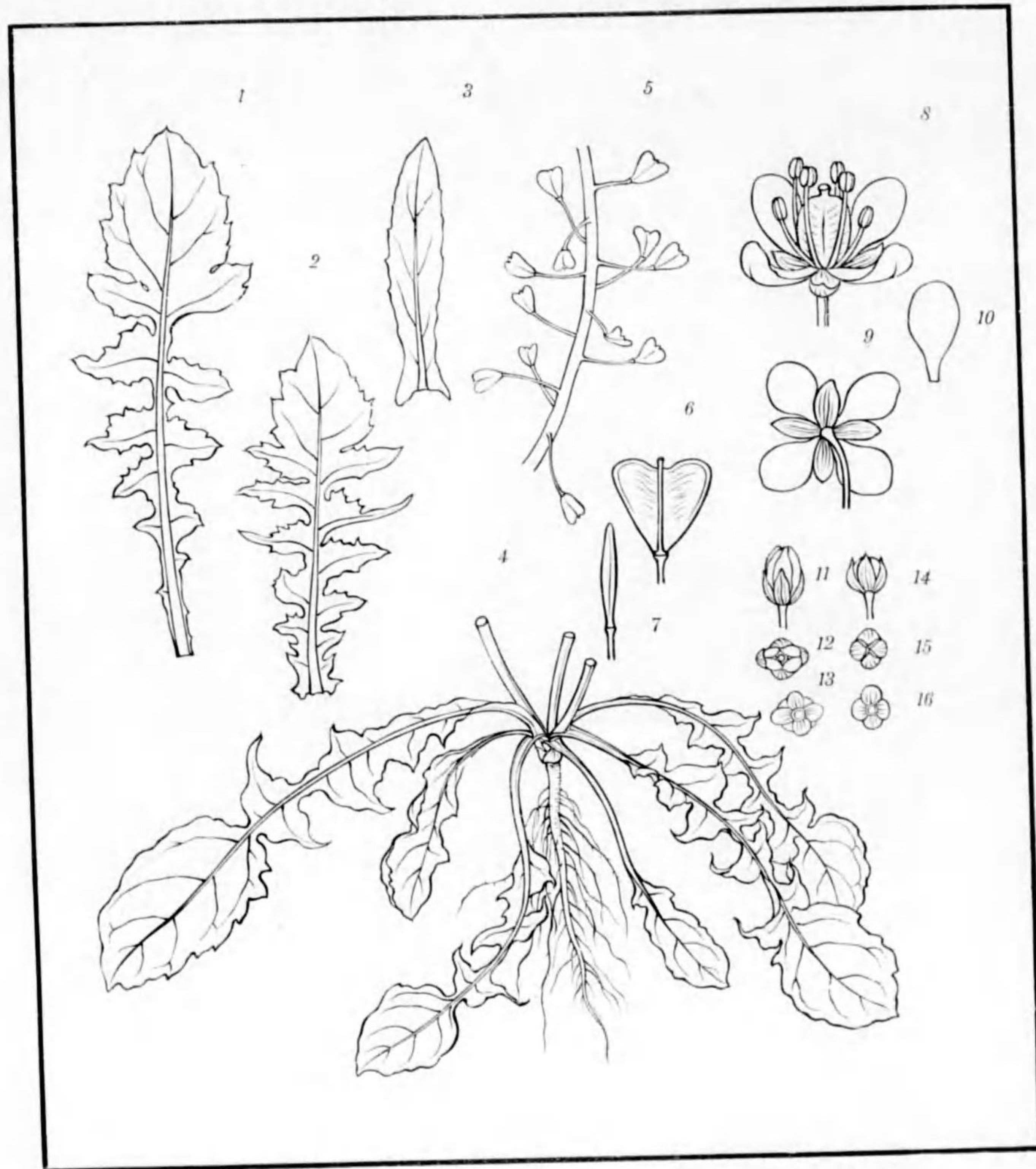
昔日越王曾て異人に遇ふて此方を得たり極めて能く齒牙を固くし筋骨を壯んにし腎水を生ず。凡そ年未だ八十に及ばざるもの之を服すれば鬚髮黒に返り、齒落ちて更に生ず。年少これを服すれば老に至るも衰へず。此に遇ふを得る者は、つとに仙緣あり。當に之を珍重すべく、輕しく泄すべからず。其方蒲公英一斤、根を連ね葉を帯びて取り、洗淨して天日を見せしむる勿れ。陰乾して斗子に入れ、解鹽一兩、香附子五錢、二味細末となして蒲公英の内に入れ一宿を流し、分ちて二十圓となし、皮紙三四層を用ひて裏み札定するに六一泥即ち蜆蛎の殻を用ひ、法の如く固濟し、甕内に入れて焙乾し、乃ち武火を以て煨す。通紅を度と爲し、冷定して取出し、泥を去り末と爲す。

早晚牙を擦するるとき之を嗽き、吐嚔は便に任かず。久々なれば方に効あり。

白髮黒に返り、落齒復た生じて還少の奇效を奏すること、果して此説の如くなるや否やを知らずと雖も、日本藥局方には苦味健胃劑として之を收む。

支那人は蒲公英を服して少年に還るの方を説けども、蒲公英を觀賞することを説かず。唐宋の詩歌一も此草を流詠せるものなく、唯だ我國の俳句に於て、之を見るのみ。

蒲公英や瀧より上の里の春 道 産
蒲公英や宮提灯の下くらみ 春 鴻
蒲公英や一目に見ゆる莖と花 乙 二
道芝や蒲公英の花低く咬く 子 規
また特に誦す可きの句なし。



1, 2, 3. 葉。4. 根。5. 果實ノ莖ニ附着セテ狀。6. 果實ノ廓大。7. 全側面。8. 花ノ廓大。9. 全背面。
10. 種。11. 大 蕾。12. 全上面。13. 全背面。14. 小 蕾。15. 全上面。16. 全背面。



Capsella Bursa pastoris, Moench.
(薺) なづな

薺

Capsella Bursa-pastoris, Moench.

十字花科 (Cruciferae)

ナツナ漢名は薺。説く者曰く、ナツナは撫菜なり。愛撫の義ならんと。或は曰く、ナツナは夏無なり。此草秋生じ春菜を夏枯るゝを以て夏無と名づく。孰れか是なるを知らず。田圃圃畝の間に自生し、莖の高さ五六寸より一尺に達す。葉は蒲公英に似て小さく、春初莖を抜き、四瓣の小白花を着け、繖状を成す。後に細小なる莢を結ぶ。形三味線の撥に似たるを以て三味線草又はペン草の別名あり。
薺は早く延喜式に見え、年中行事秘抄にも、正月上子日内蔵若葉を供する事。内膳司同じく之を供す。七種菜は善紫葉芹善御形須須代佛座とあり。正月七日の節句に此七種の若菜を羹として進め、以て病邪を辟除するは王朝公例の行事なり。後世なほ其風に沿ひ七日の朝七草なづなの歌を唱へつゝ、七菜を打はやし、粥に和して炊き、これを七種粥と曰ふ。是れ蓋し隋唐の風習を模せるものにして、若菜摘みは春頭第一の樂事なりき。
春日野の若菜摘むにや白妙の袖ふりはへて人の行くらん 貫之
舊都の士女白妙の袖振りはへて春日野の邊りに若菜摘みす。正に是れ古土佐得意の好

畫題ならずんばあらず。而して薺は實に此等若菜の最たり。

御園生のなづなの葉も立ちにけり今朝のあさ菜に何をつまひし 行忠
君が爲め夜ごしに摘める七くさのなづなの花を見て忍びませ

その愛重せられたること想ふべし。支那に在りては薺の名早く周代に見え、詩の風風に誰謂荼苦。其甘如薺とあり。新春の盤上に缺く可からざる嘉蔬として、古來愛用せられたる者の如く、而して東坡羹に因り特に著る。蘇東坡嘗て菜羹を煮る。其法全く魚肉五味を用ゐず。菘若くは薺若くは蘆蕪若くは薺を以て揉洗すること數過辛と汁とを去り先づ生油少許を以て釜縁及び釜蓋を塗り、菜を湯中に下し、生米を入れて、穂と作し名づけて東坡羹と曰ふ。其餘十二に與へし書に云く

今日食善甚美。念君臥病。鈔酒醋皆不可近。惟有天然之珍。雖不甘於五味。而有味外之美。本草善和肝氣。明目。凡人夜則血歸于肝。肝爲宿血之臟。過三更不睡則朝且面色黃燥。意思荒浪。以血不得歸故也。若肝氣和。則血脈流通。津液暢調。瘡疥於何有。君今患瘡。故宜食善。其法取善一二升許。淨擇入淘了。米三合。冷水三升。生薑不去皮。棗兩指大。同入釜

中。澆生油一椀。當於釜面上不得觸。觸則生油氣。不可食。不得入鹽。若若知此味。則陸海八珍皆可鄙厭也。天生此物。以爲幽人山居之蔬。輒以奉傳。不可忽也。
乃ち知る東坡羹も亦薺を以て最佳と爲すことを。陸放翁に薺羹を食ふ詩あり曰く

食善甚美。蓋蜀人所謂東坡羹也。善德芳甘妙絕倫。吸來恍若在臍。尊羹下政知難敵。牛乳拌酥亦未珍。異味頗思修淨供。秘方當借授厨人。午窓自撫彭亨腹。好住烟村莫厭貧。

食善三首 節錄二首
小著鹽醃和滋味。微加薑桂助精神。風爐畝鉢窮家活。妙訣何曾肯授人。
采々珍蔬不待畦。中原正味壓羣絲。挑根擇葉無虛日。直到開花如雪時。
薺の珍蔬として雅人顧客に愛重せらるゝ此の如し。而して其花も亦何ぞ賞翫に値せざらんや。
薺花雖未開。著地爛於顏。程俱
薺花滿地無人見。惟有山蜂度短籬。劉克莊
の如き淨麗清閑移して繪畫に上すべく若し夫れ
よく見れば薺花さく垣根かな 芭蕉
に至りては萬物靜觀すれば皆自得するの玄趣あらすや

415
7

大正九年二月十日印刷
大正九年二月十五日發行

(非賣品)

不羣	許芳	復圖	製譜
著者	佐田英吉	印刷者兼	影刻者
和	福岡易之助	東京市神田區南神保町二番地	東京市神田區南神保町二番地
田	村上篤太郎		
英			
作			

發行所
 東京市神田區南神保町二番地
 白水社內 群芳圖譜刊行會

電話東京四六二〇番
 電話本局四二二三番

終